

居間

涼しい流れは晩夏の夕暮に思いがけなく
父は聞いている、季節を
そして遥か遠くの色合いを

古ぼけた時間の中に思いがけなく
ほの暗い空気に身をもたせかけて
夕食の支度する音を眺めている

私はさっき買ってきたばかりのビー玉を
澄明な、自我の薄い魂の滴をそっと包む
そして、この静寂のふれ合いをそっと包む

(1984.8.7)